

西魏・北周の対外政策と中国再統一へのプロセス

——東部ユーラシア分裂時代末期の外交関係——

菅 沼 愛 語

はじめに

二世紀末、約四百年間にわたって中華世界を治めてきた漢帝国は崩壊し、約四百年間の大分裂時代に入ります。三国時代を皮切りに、西晋による一時的な再統一はあったものの、北方民族（匈奴、羯、鮮卑）と西方民族（氐、羌）の侵入により、中国は分裂と動乱の五胡十六国時代、次いで南北朝時代に突入する。その南北朝時代の後半、華北の北魏が五三五年、西魏と東魏に分裂し、攻防戦を繰り返して更に混迷が深まるかと思われたが、西魏・北周が東魏・北斉を圧倒し、五七七年には北周が北斉を滅ぼして華北を再統一する。その後、北周は臣下の隋に国を奪われる（五八一年）¹が、隋は五八九年、南朝の陳を滅ぼし、中国の再統一を果たす。

いっぽう西方では、長期にわたり地中海世界を統一し君臨していたローマ帝国が分裂し、ゲルマン民族の大移動にともないローマ的秩序が崩壊した後は、ユスティニアヌス帝による再統一の試みはあったものの、分裂した状態で諸国家が定着していく。その後、西方世界では諸国家の分立が常態になったのに対し、中国は統一国家である事が常

態となる。この東洋と西洋の歴史的発展の大きな相違は、一つには隋唐による再度の長期的な統一に負う所が大きい。その意味で、隋による中国再統一は、唐による長期的な支配の維持と併せて、東部ユーラ

シアの基本的な構図を決定する重要な出来事であったと言えるだろう。

本稿では、約四百年の分裂時代の最終段階にあたり、再度の長期統一王朝である隋唐へのプロセスともなる西魏・北周の隆盛、とりわけ対外政策を取り上げ、同国が外交面で如何にして東魏・北斉を凌ぎ、華北統一を成し遂げたかを、南朝（梁・陳）や周辺諸族（柔然、吐谷渾、突厥）も含めた広い外交関係からグローバルに考察する。また、西魏・北周の対外政策が隋の外交に与えた影響についても考える。

北魏が東西に分裂した当初は、東魏が、兵力、経済力、領土の広さ等において西魏を凌駕していた²。西魏が、こうした劣勢をどのように克服し、東魏・北斉を圧倒していったのかを、軍事面に着目し、西魏の軍制改革について論考した先行研究は多い。西魏の軍隊はもともと東魏に比べて鮮卑族の兵士が少なかった上に、五四三年（大統九）、邙山の戦いで東魏に惨敗し、宇文泰の直屬部隊はほぼ喪失した。新たな兵力を確保する必要性に迫られた宇文泰は、そこで漢人農民（郷兵）

も積極的に徴兵し、儀同府に所属させて二十四の軍を組織した⁽³⁾。効率よく系統化されたこの二十四軍制によって西魏・北周は次第に東魏・北斉を圧倒し、遂には北斉を攻め滅ぼして華北を再統一する。先行研究では、西魏の二十四軍制が府兵制の淵源となり、隋、唐に継承されていったと見ている⁽⁴⁾。

軍事改革が西魏・北周の原動力になったとの見方は無論重要であるが、本稿では、西魏・北周の覇業達成の背景の一要因である外交に焦点を当てて考察する。分裂期には他国を圧倒するために外交によって周辺国家と連繫する事も必要であり、例えば、南朝の宋・斉は、柔然、吐谷渾等と連繫して北魏の牽制を図っている⁽⁵⁾。翻って、西魏・北周を巡る国際情勢を概観すると、建国期の西魏は、東魏が、南の梁、北の柔然、西の吐谷渾と通好して西魏包囲網を形成したため国際的に孤立していた⁽⁶⁾。また、北周と北斉の対立は突厥に付け入る隙を与えた。北周も北斉も、突厥の支援の得るために競って贈物をし、可汗の歓心を買おう事に腐心したため、佗鉢可汗から「南に二人の孝行息子（北周と北斉）がいれば、突厥に物不足の心配はない」と揶揄され、翻弄された（『周書』卷五〇突厥伝）。

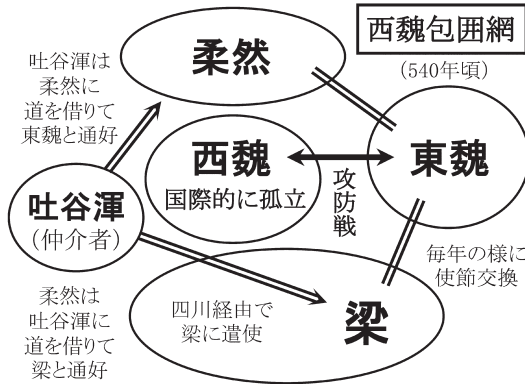
本稿では、特に以下の四点に注目しながら、西魏・北周の対外政策を広範な視点から考察する。

第一に筆者が注目した点は、南北双方の国際情勢を包括的に考慮しながら西魏・北周の対外政策を考察し、東魏・北斉の対外政策との相違点についても比較検討する事である。例えば、南で侯景の乱が勃発した時期、北でも柔然が滅亡して突厥が台頭している点に注目した。南北で同時期に起こった国際情勢の激変に対し、西魏はどのように関

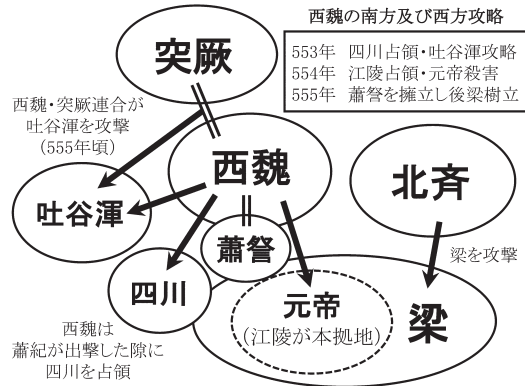
わり対外戦略を成功させたのか、北斉は何故南北の政変をうまく攻略できなかったのか、その理由について考えたい。また、北方の突厥が台頭した後に、北周と北斉を互いに牽制させて勢力拡大した事は比較的良好に知られているが、北周が、この悪状況を打開するために南の陳と連繫し、北斉攻略を図った点に、筆者は注目した。陳は何故北周を同盟国に選んだのか、陳に対する北周・北斉の外交政策の違いはどこにあったのかを考えたい。尚、侯景の乱に関しては、岡崎文夫氏、吉川忠夫氏、川勝義雄氏らが論考し、乱を契機に西魏が領土拡張した点については前島佳孝氏が考察しており、侯景の乱と西魏との関わりについては先行研究も指摘している⁽⁷⁾。しかし、同じ時期に柔然が突厥に滅ぼされ北方でも政権交代が起こっている事や、北方の政変に対する西魏・北斉の対応については、あまり注目されていない。また、北周、北斉と突厥との外交については護雅夫氏が概観し、平田陽一郎氏は、北斉滅亡後、突厥が北斉の王族を擁立して北周に対抗した事、周隋革命の時、楊堅が、北周の千金公主の降嫁を利用して突厥と和睦し、北周王族の肅清を図った事などを研究している⁽⁸⁾。北周と陳の連繫については、岡崎文夫氏、呂春盛氏が指摘している⁽⁹⁾。この様に北周と突厥、陳との各々の外交関係については先行研究も論考しているが、南北の情勢を総合的に見るという視点が弱いと感じるので、筆者は、本稿で南北両方の情勢を視野に入れながら北周の外交を考えたいと思う。

二番目の注目点は、西魏と突厥との通好である。建国当初の西魏は東魏の構築した包囲網に圧迫され国際的に孤立しており、突厥との通好は、西魏にとって包囲網を打開するための重要な転換点になった。この時代の中国と突厥との外交関係に関しては、先述の様に、突厥が

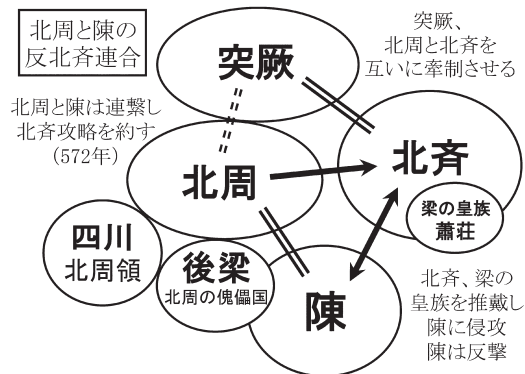
【図A】西魏建国期（540年頃）



【図B】西魏拡張期（550年代）



【図C】北周を巡る国際情勢（570年代）



図：540年頃から580年頃までの外交関係の推移。黒矢印は敵対行為、二重線は同盟や友好関係、破線は希薄な同盟関係を表す。

北周と北斉の対立に乗じて勢力拡張した事が知られているが、勃興時の突厥と西魏との通好の重要性に関しては、あまり注目されていないので、本稿では西魏と突厥の通好の意義について考える。

三番目の注目点は、西魏と東魏が盛んに周辺諸族（柔然、吐谷渾、突厥）と婚姻関係を結んでいる点である。この時期、中原王朝（西魏・北周、東魏）と柔然、吐谷渾、突厥の間で行われた通婚の例は多く、二重、もしくは三重に婚姻関係を結ぶ事もあり、政略結婚は重要な外交戦略であった。筆者は、西魏、東魏の婚姻政策は両国の攻防戦と密接に関連していると考えられる。年表と表も用い、攻防戦と婚姻政策の関連性を検討する。尚、この時期の和蕃公主の降嫁については藤野月子氏が全体像を考察し、「分裂していた西魏、東魏は、婚姻を通じて

て自己の優位性を維持するために柔然・突厥と結び付いた」と総括している¹⁰⁾。筆者は個々の重要な婚姻について詳細に考察する。また藤野氏が考察していない、東魏と吐谷渾の二重結婚、西魏と突厥の通婚も取り上げ、その歴史的意義についても考えたい。

そして四番目に筆者が留意した点は、西魏・北周の覇業達成の理由を柔然、突厥、吐谷渾、南朝（梁・陳）の動静も視野に入れ、包括的に見る事である。西魏・北周の対外政策を広い視野から論じた研究としては、呂春盛氏の研究が上げられる¹¹⁾。呂氏は、例えば、建国当初の西魏が東魏、梁、柔然、吐谷渾による包囲網に取り巻かれて孤立していた事、この西魏包囲網は突厥が柔然を滅ぼした事によって打破された事、陳との対北斉連合が北周の北斉討滅戦に有利に作用した事など

を指摘している。しかし、こうした見方はその後の研究にあまり継承されておらず、呂氏の研究成果が十分に活かされているとは言えない。本稿では、呂氏の研究成果も取り入れつつ西魏・北周の外交戦略を再構成したいと思う。

本稿の章立てでは三章から成り、第一章で西魏建国当初の対外政策、第二章で西魏の積極的対外拡張、第三章で北斉滅亡前後の北周の対外政策を各々取り上げる。

本稿では『魏書』『周書』『北斉書』『隋書』『北史』『南斉書』『梁書』『陳書』『南史』『資治通鑑』から該当部分を抜き出して事実関係を明らかにし、年表・表・図にまとめ、考察を加えた。建国期の西魏の対外政策については〔年表1〕、対外拡張期の西魏の対外政策については〔年表2〕、北周時代の対外政策については〔年表3〕、西魏、北周、東魏と周辺諸族（柔然・吐谷渾・突厥）との婚姻政策については〔表〕、西魏と周辺諸国との合従連衡の推移については〔図〕に各々まとめた。これらは、この時代を研究する際に有益になると思われる。尚、年代は史料に従って太陰暦で記す。括弧内の年号は、先に西魏・北周の年号、次いで東魏・北斉の年号を記した。

第一章 西魏建国当初の対外政策―西魏・東魏の 攻防戦と婚姻政策（五三五―五四七年）

北魏は五三五年（大統元、天平二）、東西に分裂し、西魏は五三六年（大統二、天平三）から五四六年（大統一二、武定四）まで東魏との間で激的な攻防戦を展開した。この時期、西魏は柔然と通婚し、東魏は柔然、吐谷渾と二重もしくは三重に婚姻関係を結び、それぞれ周

辺諸族との和親に努めている。西魏も東魏も、相手国を凌駕するために対外政策にも力を注いだと思われる。筆者は、周辺諸族に対する西魏、東魏の政略結婚は、両国の対戦結果とも連動していると考え、〔年表1〕と〔表〕で攻防戦と周辺諸族との政略結婚の関連性を示しつつ考察する。〔図A〕も参照されたい。

（一）東魏と梁の使節交換（五三六年より）

東魏の高歓は、五三六年（梁の大同二年）、梁の武帝に遣使して通好を開始し、以後、東魏と梁は毎年の様に使節を交換した（『梁書』卷三武帝紀下、『資治通鑑』卷一五七）。高歓は、西魏との対立・交戦を考慮し、南朝との親善に努めたのである。これに対して、西魏は梁とは疎遠で、使節の往来はほとんど見られなかった¹²⁾。

（二）西魏・東魏間の攻防戦と、両国の柔然との通婚

五三六年、高歓が西魏に侵攻し、夏州（陝西省）を襲撃したため、靈州（寧夏回族自治区）や涼州（甘粛省）の刺史は高歓に降伏し、西魏には痛手となった。勢いづいた高歓は、五三七年（大統三、天平四）にも西魏に侵攻し、十月、沙苑（陝西省）で西魏軍と東魏軍が激突したが、東魏軍が大敗した（『周書』卷二文帝紀下、『北斉書』卷二神武紀下、『資治通鑑』卷一五七）。

西魏は、五三五年より柔然の可汗阿那瓌に遣使し和陸を請願していた。この頃、柔然が頻繁に入寇し、北方での防戦が負担になったため、西魏は柔然との和陸を図ったのである。西魏と柔然は和陸交渉の末、阿那瓌の兄弟塔寒に化政公主（西魏の元翌の娘）が嫁ぎ、文帝も阿那瓌の娘を娶って二重の婚姻関係を結ぶ事になった（『周書』卷三三庫狄峙伝、楊荐伝、『北史』卷九八蠕蠕伝、『資治通鑑』卷一五七、卷一

〔表〕西魏・北周および東魏と周辺諸族（柔然、吐谷渾、突厥）との婚姻関係

年代	国	婚姻関係	史料	外交的な背景
537年頃	西魏と柔然	西魏の文帝と悼皇后（柔然可汗阿那瓌の娘）	『北史』13悼皇后伝、98蠕蠕伝	536年と537年に東魏が西魏に侵攻。西魏は東魏の更なる侵攻に備えるため、柔然と通好して東魏の牽制を画策
537年頃	西魏と柔然（二重結婚）	柔然の塔寒（阿那瓌の兄弟）と西魏の化政公主（元翌の娘）	『北史』蠕蠕伝、『資治通鑑』158	
541年	東魏と柔然	柔然の菴羅辰（阿那瓌の太子）と東魏の蘭陵郡長公主（常山王の妹）	『北史』蠕蠕伝	541年に西魏の悼皇后が病死したため、東魏は柔然と二重に通婚する事で親善を強化し、西魏の牽制を画策
542年	東魏と柔然（二重結婚）	東魏の高湛（高歡子、後の北齊武成帝）と隣和公主（菴羅辰の娘）	『北齊書』7武成帝紀、『北史』蠕蠕伝	
545年	東魏と吐谷渾	東魏の孝静帝と吐谷渾可汗夸呂の従妹	『魏書』12孝静帝紀、101吐谷渾伝、『資治通鑑』159	東魏は543年の邙山の戦いで西魏に大勝したが、西魏を滅ぼせなかったため、柔然、吐谷渾と幾重にも通婚して親睦を深め、西魏を外交的に圧迫しようと画策
545年頃	東魏と吐谷渾（二重結婚）	吐谷渾可汗夸呂と東魏の広楽公主（濟南王匡の孫）		
545年	東魏と柔然（三重結婚）	東魏の高歡と蠕蠕公主（阿那瓌の娘）	『北史』14蠕蠕公主伝、『資治通鑑』159	
551年	西魏と突厥	突厥の土門（伊利可汗）と西魏の長楽公主	『周書』50突厥伝、『資治通鑑』164	西魏は東魏に包囲され国際的に孤立し、突厥と通好して孤立からの脱却を画策
568年	北周と突厥	北周の武帝と阿史那皇后（突厥木杆可汗の娘）	『周書』5武帝紀、突厥伝	突厥と親善強化して北齊に対抗するため
580年	北周・隋と突厥	突厥の佗鉢可汗と北周の千金公主（後に隋から楊氏の姓と大義公主の称号を与えられる）	『周書』突厥伝、『資治通鑑』173、174、平田陽一郎「周隋革命と突厥情勢」	突厥との和睦と、公主降嫁を口実に北周諸王を呼び粛清する事を目的に、楊堅が実行

五八）。五三八年（大統四、元象元）、文帝は、阿那瓌の要求を容れて乙弗皇后を廃后とし、阿那瓌の娘を皇后（悼皇后）にした（『北史』卷一三悼皇后伝、蠕蠕伝）。この前年の五三七年、沙苑の戦いで、西魏は東魏の侵攻を退けたが、東魏の脅威は依然強く、西魏は、柔然との親善を強固にする事で、東魏の更なる攻撃に備えようとしたのであろう。

これに対し、東魏の高歡も柔然に遣使して阿那瓌に通婚を請願したが、阿那瓌は西魏と通婚後の五三八年五月に東魏領の幽州（現北京）、九月には肆州（山西省）を各々襲撃し、東魏の使者元整を殺害して東魏との通好を絶った（『北史』蠕蠕伝）。阿那瓌は西魏との親善を重んじ、東魏の和睦要請を拒絶したのである。それでも高歡は阿那瓌との通好を望み、報復に柔然の使者を殺すような事はせず、使者を柔然に帰国させた（『北史』蠕蠕伝）。高歡は、連年西魏と交戦したが敗戦が続いたため、柔然と婚姻関係を結んで西魏を牽制したいと考えたのであろう。柔然の使者を帰国させたのは、阿那瓌と通好する機会を模索するためであった。

柔然の阿那瓌は、しかし、西魏と婚姻を結んだにもかかわらず、五四〇年（大統六、興和二）、西魏に侵攻し、文帝と廢后乙弗氏の復縁を非難した（『北史』蠕蠕伝、『資治通鑑』卷一五八）。阿那瓌は、娘（悼皇后）への侮辱は柔然への侮辱に等しいと見做し、報復のために西魏を攻撃したのかも知れない。文帝は廢后乙弗氏に自殺を命じ、宇文泰も諸軍を沙苑（陝西省）に駐屯させて柔然への防備を固めたため、柔然は撤退した（『北史』蠕蠕伝、『資治通鑑』卷一五八）。

だが、しばらくして悼皇后が病死すると、高歡は阿那瓌に遣使して

西魏を誇り、悼皇后が西魏に殺害された事、阿那瓌がかつて北魏の助力で国を保てた事、東魏こそが北魏の正統な後継者である事などを伝え、東魏と結ぶよう促した（『北史』『蠕蠕伝』、『資治通鑑』卷一五八）。阿那瓌は高歡の提案に応じて東魏に遣使し、五四一年（大統七、興和三）、阿那瓌の太子菴羅辰と常山王の妹蘭陵郡長公主が結婚した（『北史』『蠕蠕伝』）。五四二年（大統八、興和四）には高歡の第九子高湛（後の北斉の武帝）と菴羅辰の娘隣和公主が結婚し（『北史』『蠕蠕伝』、『北斉書』卷七武帝紀）、東魏と柔然の間は二重の婚姻で固く結ばれた。

高歡は、こうして西魏と柔然の間に楔を打ち込む傍ら、東魏と柔然の親善を強化した。西魏もまた、悼皇后の死後、阿那瓌に遣使して再婚を試みたが、東魏に先を越され、再婚話は実現しなかった（『周書』卷三三楊荐伝）。

以上の様に、建国直後の西魏と東魏は激しい攻防戦を繰り返したが、対外的にも、柔然と連繋して相手を牽制しようと、競って柔然と婚姻関係を結ぼうとしたのであった。

（三）東魏と吐谷渾の通好開始（五四〇年）——西魏包囲網の形成——

五四〇年、吐谷渾の可汗夸呂が、柔然に道を借り、初めて東魏に遣使した（『魏書』卷一〇一吐谷渾伝、『資治通鑑』卷一五八）。吐谷渾は西魏と境界を接し、大統年間中（五三五～五五一）には西魏の辺境地帯をしばしば襲撃していた（『周書』卷五〇吐谷渾伝）。吐谷渾は西魏と対立する関係上、東魏との通好を図ったのである。東魏もまた吐谷渾に対し、西方から西魏を圧迫する事を期待したと思われる。高歡は、すでに梁、柔然と通好して西魏を包囲する構えを見せていたが、

ここに更に吐谷渾が加わる事によって東西南北より西魏を包囲する態勢が整い、西魏は国際的に孤立を深める事になった。

青海の吐谷渾は東西交易を中継し、南朝と柔然・西域を結ぶ仲介者として、経済的にも外交的にも重要な役割を果たしていた。¹⁴吐谷渾は、益州（四川省）經由で南朝と通好した（『梁書』卷五四河南伝）だけでなく、柔然にも道を貸し、柔然の使者が益州經由で南朝と通好できるように、便宜も図っていたのである（『南斉書』卷五九芮芮虜伝）。柔然と吐谷渾は、この様に共生関係にあったので、吐谷渾が東魏に遣使する時には、柔然が吐谷渾に道を貸したのである。

尚、遠国と通好して隣国を挟撃する外交形態を遠交近攻というが、東魏と吐谷渾の通好は、この遠交近攻に相当する。後に隋は遠交近攻策を実施して突厥を分裂させる（『隋書』卷五一長孫晟伝）が、隋はこの時代に行われた外交戦略も参考にしたと思われる。

（四）西魏と突厥の通好開始（五四五年）——その歴史的意義——

五四二年（大統八、興和四）、高歡は西魏に侵攻し、西魏の要衝玉壁（陝西省）を攻囲するが攻めあぐねて撤退した。翌五四三年（大統九、武定元）、今度は宇文泰が東魏に侵攻し、洛陽の北にある邙山で東魏軍と対戦するが、大敗した。しかし勝利した高歡もまた激戦に疲弊し、撤退した（『周書』卷二文帝紀下、『北斉書』卷二神武帝紀下、『資治通鑑』卷一五八）。このため、二年間の激闘にもかかわらず両者の雌雄は決しなかった。

尚、邙山の戦いの時、宇文泰の直属部隊約三方が、ほぼ壊滅した。¹⁵宇文泰は、この危機的状况を乗り切るため、敗戦直後、関隴（陝西省・甘粛省）の豪族から郷兵（漢人農民）を徴集し、これより三年の

間、毎年各地で軍事訓練を行って軍隊の補強に努めた（『周書』文帝紀下）。宇文泰は、徴集した兵を儀同府に所屬させ、二十四軍に組織した。この軍制改革が西魏の軍事史上の重要な転機となり、後には隋唐に継承されて府兵制の起源になった事は著名であるが、筆者は、宇文泰は危機を乗り切るため、外交面でも転機となる重大な決断を下したと考える。それは、邙山の敗戦から二年後の五四五年（大統一、武定三）に行われた、突厥への初めての遣使である。

宇文泰は五四五年、新興の突厥に対し、酒泉（甘肅省）のソグド人安諾槃陀¹⁶を派遣して誼を結んだ（『周書』突厥伝）。突厥はこの頃、柔然の従屬下にあつたので、宇文泰は突厥に柔然の牽制を期待したと考えられる。突厥の酋長土門（初代の伊利可汗）は、西魏の使者が到来すると、「今大使至、我國將興也。〔いま大国の使者がやって来た。わが国は今まさに興隆するであろう。〕」と言って喜んだ。土門はこれより先、長城付近に来て絹を購入し、西魏との交易を希望していたので、五四六年（大統一、武定四）、西魏に遣使して特産物を献上した（『周書』突厥伝、『北史』卷九九突厥伝）。突厥もまた、西魏との通好が国家の興隆に利すると判断したのである。尚、『周書』卷二十七宇文測伝¹⁷によれば、突厥は五四二年（大統一、大統八）に初めて西魏に入寇したが、五四五年に宇文泰が土門と誼を結んでから、北周時代の五七八年（宣政元）四月に幽州（現北京）を襲撃するまで、記録の上では西魏・北周に一度も入寇していない。つまり、宇文泰と土門が通好を開始して以降、西魏・北周は突厥と親善関係を維持し続けたのである。西魏にとっては、突厥との親睦が東魏を圧倒していくための重要な布石になったのである。

（五）東魏と柔然、吐谷渾の通婚（五四五年）

邙山の戦い（五四三年）から二年後の五四五年、東魏の高歡も吐谷渾、柔然と各々通婚し、親善を強化している。即ち、五四五年二月、吐谷渾の可汗夸呂の従妹が東魏の孝静帝に入内し、次いで時期は不明であるが東魏の広楽公主（濟南王匡の孫娘）が夸呂に嫁いだ（『魏書』卷一二孝静帝紀、吐谷渾伝、『資治通鑑』卷一五九）。この二重の婚姻によつて東魏と吐谷渾の親睦は深まり、以後吐谷渾の朝貢は絶えなかつた（『魏書』吐谷渾伝）。また五四五年八月、阿那瓌の娘蠕蠕公主が高歡に嫁いだ（『北史』卷一四蠕蠕公主伝、『資治通鑑』卷一五九）。これにより東魏と柔然は三重の婚姻関係で固く結ばれ、両国の国境地帯は安泰となり、武定末（五五〇年頃）まで柔然から東魏への遣使が継続した（『北史』蠕蠕伝）。高歡は、邙山の戦いで勝利したにもかかわらず西魏を滅ぼす事ができなかったため、吐谷渾、柔然との結束を一層強化する事で西魏を対外的に圧迫しようとしたのであろう。

（六）まとめ

この時期の西魏をめぐる国際情勢をまとめると、東魏が、梁、柔然、吐谷渾と通好し、柔然・吐谷渾とは更に幾重にも婚姻関係を結んで固く連繫した上で西魏包囲網を構築し、西魏を外交的に圧倒した。西魏はこれに対抗し、五四五年、新興の突厥と通好を開始して国際的孤立からの脱却を図つたのであつた。

第二章 西魏の積極的対外拡張

— 侯景の乱、柔然の滅亡、突厥の興隆と

西魏の関わり（五四八年～五五六年）—

五四八年（大統一四、武定六）、侯景の乱が勃発すると、西魏は梁の混乱を好機と見て出兵し、四川を占領（五五三年）、梁の元帝を殺害（五五四年）して江陵（湖北省）に傀儡政権である後梁¹⁸を樹立する（五五五年）など領土を拡張した。侯景の乱の時にこの様に西魏が勢力を拡大した事はよく知られているが、同時期に北方で柔然が滅亡し、北方情勢に対して西魏がどの様に対応したかについては、あまり注目されていない。そこで本章では侯景の乱が勃発した五四八年以降の西魏（～五五六年）を取り上げ、柔然、吐谷渾に対する西魏の対応策を、梁への出兵や突厥との連繫とも関連させながら検討する。〔年表2〕
〔図B〕も参照されたい。

（二）北方情勢（柔然の滅亡と突厥の台頭）と西魏の関わり

（一）西魏と突厥の通婚（五五一年）

五五一年（大統一七、天保二）、突厥の酋長土門が西魏に通婚を申し出た。これより先、土門は、柔然を攻撃しようとした鉄勒を撃破し、鉄勒の民五万余を降伏させると、柔然の阿那瓌に通婚を請願した。しかし阿那瓌が土門を侮辱したので土門は激怒し、柔然の使者を殺害すると、西魏に通婚を求めたのであった。宇文泰は突厥の求めに応じ、長楽公主を土門に嫁がせた（『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一六四）。
当時の西魏は、侯景の乱で混乱する梁に対し派兵中であつた。即ち、五四九年（大統一五、武定七）、襄陽（湖北省）に拠る岳陽王蕭贇

（梁の武帝の孫）が、江陵（湖北省）の叔父蕭繹（武帝の第七子、後の元帝）と対立し、西魏に援軍を要請したので、宇文泰は南方攻略を期して蕭贇に援軍を派遣した。西魏軍は、五五〇年（大統一六、天保元）には漢東（湖北省）、五五一年（大統一七、天保二）には汝南（河南省）を各々奪取した（『周書』卷二文帝紀下、『資治通鑑』卷一六二～卷一六四）。

この様に、西魏は南方への領土拡張に意欲的であつたため、北では突厥と婚姻を結んで和睦を強化し、突厥に柔然を牽制させて、南方攻略に専念したと考えられる。

（2）突厥による柔然討滅（五五二年～五五五年）

— 柔然滅亡に対する西魏と北斉の対応の違い —

突厥の土門は、西魏の長楽公主を娶つた翌年の五五二年（廢帝元、天保三）、柔然を襲撃し、阿那瓌を大いに破つた。このため阿那瓌は自殺し、柔然は混乱に陥り、阿那瓌の息子達は部族を率いて南下を開始した（『北史』蠕蠕伝、『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一六四）。

柔然の亡命者は、北斉と西魏に各々亡命した。北斉も西魏もこの頃、毎年の様に南に出撃していたため、北方からの亡命者に対する対応策が、両国の命運を左右する事になった。まず北斉の対策を取り上げ、次いで西魏の対応策を見る。

北斉には、阿那瓌の太子菴羅辰が、突厥からの攻撃を逃れて亡命した（『北史』蠕蠕伝、『資治通鑑』卷一六四）。菴羅辰は、妻が東魏の蘭陵郡長公主であり、娘の隣和公主も高湛（高歡の子）に嫁いでいたので婚家の北斉を頼つたのであろう。五五三年（廢帝二、天保四）、北斉の文宣帝は菴羅辰を保護すると、自ら突厥を征伐し、菴羅辰を可

汗に擁立して馬邑川（山西省）に置き、食料・衣類等を支給した（『北齊書』卷四文宣帝紀、『北史』蠕蠕傳、『資治通鑑』卷一六五）。文宣帝は、太子を擁して柔然の再興を図ったと思われる。だが、五五四年（恭帝元、天保五）三月、菴羅辰が北齊に叛いたため、文宣帝は菴羅辰を討伐した。これ以後、北齊は柔然の亡命者を保護する事をやめ、柔然の餘衆が五五四年四月、六月、五五五年（恭帝二、天保六）七月に北辺に入寇すると、文宣帝が自ら輕騎兵を率いてこれを討伐した（『北齊書』文宣帝紀、『北史』蠕蠕傳、『資治通鑑』卷一六五、卷一六六）。

尚、五五三年九月、契丹が入寇したため、文宣帝が自らこれを撃退している（『北齊書』文宣帝紀、『北史』卷九四契丹伝、『資治通鑑』卷一六五）。柔然の滅亡後、突厥が契丹を攻撃したため（『周書』突厥伝）、契丹は潰走して南下し、北齊を襲撃したと思われる。

突厥、柔然、契丹の襲撃により北辺が混乱したため、北齊は、五五二年と五五五年に長城を建設し、北辺の防備を強化した（『北齊書』文宣帝紀、『資治通鑑』卷一六六）。

ここで同時期の北齊（東魏）の南方攻略を見ると、五四九年（大統一五、武定七）、梁に出兵して淮南（淮河以南）を占領し、五五二年には江北（長江以北）を占拠し、五五三年には水軍二万で建康（現南京）を攻撃する計画を立てた（『資治通鑑』卷一六二、卷一六四、卷一六五）。そして北齊は五五五年、蕭淵明（武帝の甥）を梁王に擁立して南下を試みたが、陳霸先が蕭方智（元帝の第九子）を敬帝に推戴して対抗したため、北齊は敗北し、撤退を余儀なくされた（『北齊書』文宣帝紀、『陳書』卷一高祖紀上、『資治通鑑』卷一六六）。

北齊は、この様に主戦力を南方に集結していたため、文宣帝自らが幾度も北方に出撃し、突厥、柔然、契丹からの攻撃に応戦せざるを得なかったのである。しかし、南北への出兵と長城建設は、北齊の国力を相当に疲弊させる事になった。

一方、西魏は柔然の亡命者を一切保護せず、討伐するか、突厥に引渡した。柔然の亡命者は五五二年頃、阿那瓌の子孫を奉じて河右（陝西省・甘肅省）に入寇し、涼州刺史の史寧がこれを撃破した（『周書』卷二八史寧伝）。五五四年には柔然の乙旃達官が広武（甘肅省）に入寇し、李弼がこれを撃破した（『周書』卷一五李弼伝、『資治通鑑』卷一六五）。また、五五五年、柔然の鄧叔子（阿那瓌の叔父）が、突厥の第三代可汗、木杆可汗に攻撃されて西魏に亡命したが、宇文泰は木杆可汗の引き渡し要求に応じ、鄧叔子と三千の柔然人を突厥の使者に引渡した。鄧叔子達は、この後、突厥によって尽く殺害された（『北史』蠕蠕傳、『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一六六）。西魏にとって、突厥との同盟関係が如何に重要だったかが窺い知れる。突厥は、五五三年三月、二代目の乙息記可汗が西魏に遣使して馬五万匹を献上し（『周書』突厥伝）、世代交代後も西魏と友好関係を維持していた。宇文泰も突厥との親善を重視し、突厥に柔然人を引渡したのである。

南北への両面作戦に苦闘する北齊とは対照的に、西魏は突厥との親睦を活用し、北方を憂慮する事なく南方戦線に兵力を集中した。即ち、西魏は、五五二年に漢中（陝西省）を占領した。五五三年には、四川に拠る武陵王蕭紀（武帝の第八子）が侯景討伐のために出撃した隙に、四川を占領した。五五四年一二月、江陵を占領して元帝を殺害し、五五五年正月には、江陵で蕭督を宣帝に推戴して傀儡国の後梁を樹立し

た(『周書』卷二文帝紀下、卷二尉遲迥伝、『梁書』卷五元帝紀、卷五五武陵王紀伝、『資治通鑑』卷一六三〜卷一六五)。以上の様に、西魏は突厥との親善も利用しつつ、着実に南方攻略を成功させていった。

尚、この頃、突厥の木杆可汗は西方では嚙噠(エフタル)を破り、東方では契丹を敗走させ、北では契骨(キルギス)を併呑して諸国を威服せしめ、その領地は、東は遼海から西は西海にまで及ぶと称された(『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一六六)。宇文泰は、木杆可汗と通婚して更なる親睦強化を試みるが、宇文泰の死去(五五六年)により、この結婚話は結局実現しなかった(『周書』突厥伝)。

(二) 西魏の吐谷渾攻略

(1) 五五三年の吐谷渾攻略と四川占領との連動性

宇文泰は五五三年(廢帝二、天保四)、自ら三万の騎兵を率いて姑藏(甘粛省)に進撃し、吐谷渾を攻略した。吐谷渾の可汗夸呂は、西魏軍の襲来に震駭して宇文泰に降伏し、西魏に遣使し方物を献上した(『周書』文帝紀下、吐谷渾伝、『資治通鑑』卷一六五)。

吐谷渾遠征が行われた同じ五五三年、西魏は四川を占領している。四川占領は西魏にとって重要な軍事行動であったが、それと同年に貴重な戦力を割いて宇文泰が吐谷渾を遠征した理由を記す史料はない。

四川攻撃と吐谷渾遠征が同年に行われた理由について、前島佳孝氏が明快に論考している¹⁹⁾ので、以下に前島氏の考察をまとめる。①梁の武陵王蕭紀は、一七年間の四川統治の間に吐谷渾と良好な親善関係を築いていた、②蕭紀は西魏の四川侵攻を予測していたので、侯景討伐に出撃するにあたり、西魏を牽制させるために友好関係にあった吐谷渾に対し、西魏への入寇を命じたのではないか、③宇文泰は、蕭紀が

吐谷渾に西魏攻撃を命令する事を予測し、先手を打って吐谷渾を攻撃したのではないか。以上が前島氏の論考の要点であるが、これは非常に妥当な推察であり、筆者も氏の論説に賛同する。

尚、宇文泰は騎兵三万を率いて出撃しているが、機動性の高い騎兵を使う事により、即戦即決で吐谷渾の機先を制する事ができたと思われる。五五三年に西魏が行った四川攻撃と吐谷渾攻撃は、連動した軍事行動と見るべきであろう。そして西魏にとって、四川占領は吐谷渾と梁の連繫を遮断するという外交上の意義もあったのである。

(2) 西魏・突厥連合軍による吐谷渾攻撃(五五五年頃)

吐谷渾の夸呂はしかし、西魏に降伏した後も北斉との通好を継続したため、五五三年、涼州刺史の史寧は、北斉から帰還中であった吐谷渾の使節団を涼州(甘粛省)の西赤泉で襲撃し、僕射の乞伏觸板、將軍の翟潘密、商胡(ソグド商人)二四〇人、馱馬・ラバ六百頭、数万の絹等を奪取した(『周書』卷二八史寧伝、吐谷渾伝、『資治通鑑』卷一六五)。

この後、西魏は五五五年(恭帝二、天保六)頃²⁰⁾、突厥と連合し、青海にある吐谷渾の二つの居城(樹敦と賀正)を襲撃して多くの財宝を獲得し、夸呂の妻子や吐谷渾の男女を捕虜とするなどの戦果を挙げた(『周書』史寧伝、吐谷渾伝、『資治通鑑』卷一六六)。²¹⁾突厥は、吐谷渾が掌握していた東西交易中継の利益を奪取するため、反吐谷渾で利害の一致する西魏と連合し、吐谷渾を攻撃したのである。

(三) まとめ

ここで、西魏と北斉の対外政策の違いについてまとめておく。侯景の乱が勃発した時期、南では梁が滅亡して陳が誕生したが、北

でも柔然が滅亡して突厥が台頭した。北と南で同時期に起こった政權交代、国際情勢の激変に対して、西魏は対外拡張に成功し、北斉は失敗した。それは何故か。疑問を解く鍵は、北方情勢への両国の対応の違いにある、と筆者は考える。柔然の滅亡時、王族をはじめとする亡命者が大挙して南下したが、これに対し、西魏は突厥を支持して柔然の亡命者を撃滅したが、北斉は柔然の王族を擁立して突厥に対抗した。その結果、北斉は突厥の攻撃を受ける事になった。柔然の王族も、その後、叛いたため、北斉は柔然、突厥、契丹と戦う羽目になった。北斉は南方のみならず北方にも派兵を強いられた上に、北辺の防備強化のための長城建設も必要となり、大土木事業にも国力を割かねばならなくなった。このため北斉は疲弊した。南北への両面作戦を取った事が、北斉が失敗した理由であると、筆者は考える。

一方、西魏は、東魏・北斉よりも劣勢だったが故に的を絞った対外政策を実行した。西魏には、東魏・北斉の形成した包囲網を打破する事が重要課題だったため、東魏・北斉と連繋する梁、柔然、吐谷渾に照準を定めたのである。四川占領により吐谷渾と梁の連繋を遮断し、柔然の滅亡によって吐谷渾と北斉の連絡も遮断した。その際、重要な同盟者となったのが突厥であり、西魏は利害の一致する突厥と連繋して柔然と吐谷渾を攻略し、北方と西方の脅威を取り除きながら、梁への侵攻も成功させて南方に領域を拡張したのである。

第三章 北斉滅亡前後の北周の対外政策

―北周・北斉・突厥・陳の合従連衡

(五五七年～五八〇年) ―

建国当初の北周は、突厥と連合して北斉を攻撃したが、突厥が北斉とも通好し、北周と北斉の牽制を画策したため、突厥との連繋による北斉攻略は困難になった。そこで北周は陳と連繋し、北斉を攻略する。この時代、突厥が北周と北斉の対立を巧みに利用して勢力拡張した点は比較的有名であるが、北周と陳との連繋、その重要性については、あまり注目されていない。本章では南北に対する北周の外交戦略を俯瞰し、北斉滅亡前後の北周、北斉、突厥、陳の離合集散について考察する。〔年表3〕〔図C〕も参照されたい。

(一) 北周と突厥の外交

四年)

宇文泰が突厥と親善関係を樹立して以来、西魏は突厥と連繋する事で東魏・北斉に対抗した。北周の武帝も父の外交政策を継承し、木杆可汗の娘を妃に迎えて突厥との連繋強化を図ったが、北斉も可汗に莫大な贈物をして通婚を求めたため、可汗も北斉との通婚に乗り気になった。これに対し、北周は粘り強く可汗を説得し、可汗に辛うじて北周との通婚を決断させた(『周書』『北史』突厥伝)。北斉が突厥との連繋を画策した事、突厥が北斉との通好も視野に入れ始めた事は、北周にとっては憂慮すべき事態であった。木杆可汗も北周に対し、結婚の条件に「東賊(北斉)の平定」(『周書』卷三三楊荐伝、『資治通

窓 鑑』卷一六九)を掲げたため、北周には北斉攻撃を成功させる必要があった。

史 北周・突厥連合軍による北斉攻撃は、五六三(保定三、河清二)～五六四年(保定四、河清三)、二度にわたって行われた。まず、五六三年九月から五六四年正月に行われた最初の北斉征伐では、開戦当初、北周軍が北斉の二十餘城を攻略して善戦し、突厥の木杆可汗、地頭可汗、步離可汗も十万騎を率いて来援して勢いづいたものの、晋陽(山西省)の攻略に苦戦し、戦局は北周・突厥連合軍の大敗に終わった(『周書』卷一九楊忠伝、達奚武伝、『北斉書』卷七武帝紀、『資治通鑑』卷一六九)。次いで五六四年十月、北周・突厥連合による二度目の北斉攻撃が始まった。ただ戦いの直前、北斉が捕虜にしていた北周の皇族(宰相宇文護の母ら)を北周に帰国させて和睦を試みている。このため、北周の実力者宇文護は北斉遠征を躊躇したが、約束を違えた場合の突厥の報復を恐れ、北斉に侵攻した。北周軍は洛陽等を攻撃したが、北斉の猛烈な反撃を受け、敗退した(『周書』卷一一晋蕩公護伝、『北斉書』武帝紀、『資治通鑑』卷一六九)。突厥軍も、北周の敗退を知ると撤退した(『周書』突厥伝)。

以上の様に、五六三～五六四年に行われた北周・突厥連合による二度の北斉攻撃は失敗したが、北周は西方では戦果を挙げ、五六四年、宕昌を滅ぼし、その故地に宕州を設置した。宕昌が吐谷渾と連合して西北辺を襲撃したため、北周は反撃したのであった(『周書』卷二七田弘伝、卷四九宕昌伝、『資治通鑑』卷一六九)。吐谷渾は、柔然、梁に次いで宕昌の支援も失い、更に孤立した。吐谷渾攻略に関しては、北周は成功を収めていたのである。

(2) 突厥による北周・北斉の牽制政策

五六五年(保定五、天統元)二月、北周の武帝は使者を突厥に派遣し、木杆可汗の娘を妃として迎えようとした(『周書』卷五武帝紀上、突厥伝、『資治通鑑』卷一六九)。五六三年～五六四年に行った北周・突厥連合による二度の北斉征伐が失敗したので、武帝は早急に結婚話を進め、突厥との連繫を強化すべきと考えたのであろう。しかしこの時、北斉も木杆可汗に通婚を求め、可汗も北斉との通婚に心を動かし、北周の使節団を拘留した。更に、可汗は五六五年五月、北斉に遣使し、通好を開始した(『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一六九)。木杆可汗は、二度の北斉遠征が失敗したため北周に愛想を尽かし、且つ外交を一極集中に賭けるのは得策ではないと判断して北斉との連繫を試みたと思われる。これに対し、北周の使節団は懸命に可汗を説得した。大雷風が天幕を破壊するといった天文現象も起こったため、可汗は天意を恐れ、結局北周との通婚を決断した。五六八年(天和三、天統四)三月、可汗の娘が北周に嫁ぎ、武帝は突厥との親睦を尊重し、これを皇后(阿史那皇后)とした(『周書』武帝紀上、卷九阿史那皇后伝、突厥伝)。

しかし、五七二年(建徳元、武平三)、木杆可汗が死去し、弟の佗鉢可汗が即位すると(『資治通鑑』卷一七二)、五七三年(建徳二、武平四)、佗鉢可汗は北斉に遣使して通婚を申し出(『北斉書』卷八後主紀、『資治通鑑』卷一七一)、北斉との親善強化を図った。これに対し、北周は突厥に毎年繪絮錦綵十万段を贈り、長安在住の突厥人にも衣服や食料を供給して厚遇し、突厥との連繫維持に努めたが、北斉もまた突厥に多大な贈物をして親睦強化を図ったため(『周書』突厥伝)、佗

鉢可汗は北周と北斉を互いに牽制させて利益を貪った。このため、北周は以前の様に突厥との連繫で北斉を圧迫する事が難しくなった。

(二) 北周・陳連合による北斉攻略

北周は五六九年（天和四、天統五）～五七二年（建徳元、武平三）、陳と和睦交渉を行った。

北周は、これより先の五六七年（天和二、天統三）、湘州刺史の華皎が陳に叛旗を翻した時、後梁と共に華皎に援軍を派遣して陳を攻撃したが、五六七年九月、陳軍に敗北した。勝利した陳軍は五六八年（天和三、天統四）三月、後梁の都江陵を包囲したが、陥落させる事ができずに撤退した（『資治通鑑』卷一七〇）。北周と陳は、華皎の乱（五六七年）の後、一旦通好が途絶えたが、五六九年、北周が陳に使者を派遣して旧好の修復を請願した（『周書』卷三九杜杲伝、『資治通鑑』卷一七〇）。北周は、五六九年九月より北斉の要衝宜陽（河南省）を包囲していた。また、突厥が五六五年より北斉と通好を開始したため、北周と突厥の親睦にも影が差していた。以上の理由から、北周は陳との関係改善を図ったと思われる。

一方の陳も、北斉が五七〇年（天和五、武平元）に梁の永嘉王蕭荘（元帝の孫）を梁王に推戴し、援軍も派遣して梁朝復興を支持したため、北斉と対立していた（『北斉書』後主紀、『南史』卷五四蕭荘伝、『資治通鑑』卷一七〇）。陳は北斉との和睦を模索し、五七一年（天和六、武平二）四月、北斉に遣使し、連合して北周を討伐しようとして誘ったが、北斉は陳の提案を拒絶した（『北斉書』後主紀）。このため陳は北周との和睦を決意し、五七二年、北周と使節を交換しあって和睦交渉を行ったのである（『周書』杜杲伝、『資治通鑑』卷一七一）。

北周と陳は幾度か使節を交換しあうと、連合して北斉を攻略する事を画策した（『周書』杜杲伝、『資治通鑑』卷一七一）。そして陳は五七三年（建徳二、武平四）、北斉を攻撃し、寿陽（安徽省）において、蕭荘の後見人であった王琳を撃破し、北斉が領有していた淮南を奪還した（『陳書』卷五宣帝紀、卷九呉明徹伝）。これにより北斉が推進していた梁朝復興運動は頓挫し、淮南も陳に奪われて、北斉は領土も喪失した。

(三) 北斉の滅亡と突厥による北斉亡命政権の樹立

北周の武帝は、五七五年（建徳四、武平六）七月と五七六年（建徳五、隆化元）十月に北斉に親征した（『周書』武帝紀下）。陳もまた、五七四年五月に淮北を攻め、五七五年閏九月には呂梁（江蘇省）を攻撃して北斉軍を撃破した（『北斉書』後主紀、『陳書』宣帝紀、『資治通鑑』卷一七二）。

北周は、陳の援護も幸いして晋陽等の主要都市を占領すると、五七七年（建徳六、承光元）正月、北斉の都鄴を包囲した。北斉の後主は、援軍要請の使者を突厥の佗鉢可汗に派遣したが、鄴は北周軍によって攻め落とされ、北斉は滅亡した（『周書』武帝紀下、『北斉書』後主紀、『資治通鑑』卷一七三）。そこで、北斉の范陽王高紹義（文宣帝の子で定州（河北省）の刺史）は五七七年二月、突厥に亡命して北周への抗戦を続け、北斉の皇族で營州（遼寧省）の刺史であった高宝寧も北周に抗戦した。佗鉢可汗は高紹義を北斉皇帝に擁立し、高宝寧を宰相となして北斉の亡命政権を樹立し（『周書』武帝紀下、突厥伝、『北斉書』卷一二范陽王紹義伝、『資治通鑑』卷一七三）、北周の牽制を図った。²²⁾

陳は、北齊の滅亡を知ると徐州（江蘇省）に進撃し、五七七年十月、呂梁を包囲した。陳は、華北を統一した北周に脅威を感じたのである。しかし北周はこれに反撃し、五七八年（宣政元）二月、陳軍を撃破した（『周書』武帝紀下、『陳書』宣帝紀、卷九吳明徹伝、『資治通鑑』卷一七三）。これ以降、陳は守りに転じ、五七八年三月、北周との境界線となる寿陽等の防備を強化し、北周の襲来に備えた（『陳書』宣帝紀、『資治通鑑』卷一七三）。

(五) 北齊の滅亡後、突厥による北周攻撃

突厥は五七八年四月、幽州に入寇し、吏民を殺害・略奪した。これに対し、五月、北周の武帝は自ら諸軍を率いて突厥討伐に出撃した（『周書』武帝紀下）。陳を撃破して南の憂いも除いたので、武帝は北の突厥を撃破しようと自ら出陣したのである。だが、武帝は北伐の途上で病を得、六月に崩御した（『周書』武帝紀下、『資治通鑑』卷一七三）。

北齊の高紹義は、武帝の崩御を知ると北周攻撃の好機と判断し、范陽（河北省）で勃発した盧昌期の乱に乗じ、突厥軍を率いて薊城（河北省）を襲撃した。高宝寧も蕃漢の騎兵数万を率いて襲来し、高紹義との連繫を図ったが、北周が盧昌期を撃破すると高紹義の目論見は頓挫し、高紹義は突厥、高宝寧は營州（遼寧省）に各々撤兵し、北齊亡命政権による北周攻撃は失敗に終わった（『北齊書』范陽王紹義伝、『資治通鑑』卷一七三）。

この後、突厥は五七八年一月に酒泉（甘肅省）を大々的に襲撃した（『資治通鑑』卷一七三）。このため北周の新帝宣帝は、突厥との和

睦と高紹義の北齊亡命政権の解体を期し、五七九年（大象元）二月、佗鉢可汗に対して、北周は趙王招（宇文泰の息子）の娘千金公主を可汗に降嫁させる事、突厥は高紹義を北周に引き渡す事を提案した。だが、可汗が高紹義の引渡しを拒絶したため和睦交渉は決裂した（『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一七三）。突厥は五七九年六月、并州（山西省）を襲撃し、北周は、北齊時代の長城を修復して突厥の襲来に備えた（『周書』突厥伝、『資治通鑑』卷一七三）。

北周は、この様に突厥の侵攻に苦戦したが、陳との戦いでは善戦し、五七九年一二月には淮南を尽く占領し（『陳書』宣帝紀）、南朝に対する優位を確立した。

しかし、宣帝が短命で死去し（五八〇年）、幼い静帝が後に遺されると、外戚の楊堅が実権を掌握し、北周からの禪譲を画策した。楊堅は新王朝を樹立するにあたって北周の対外政策も継承するが、突厥問題、北齊亡命政権の問題を解決する事が焦眉の急となった。

(六) まとめ

北周は、当初は北方の突厥と結んで北齊を攻撃したが、突厥との連繫が困難になると、今度は南方の陳と結んで北齊を攻略した。陳は当初、北齊と和睦して北周を攻略しようとしたが、北齊が梁朝再興を名目に陳に侵攻したため、北周を同盟者を選んだ。北周は、突厥との連繫が不調になった後も、北齊と陳の対立に乗じ、外交もうまく活用する事で北齊を滅ぼした。北周はその後、臣下の楊堅に国を奪われるが、西魏・北周時代に培われた外交経験は楊堅に受け継がれ、建国前後の隋は、外交も重視して内憂外患に対応していく。

おわりに―西魏・北周時代の外交の隋への影響―

最後に西魏・北周の対外政策を総括し、隋への影響についてふれておく。

建国期、東魏の方が外交戦略に長じ、西魏を国際的に孤立させて圧倒した。西魏は悪状況を打破するために突厥と連繫し、侯景の乱や柔然の滅亡といった南北の混乱に巧みに乗じて勢力を拡大し、北齊よりも優勢に立つようになった。北周に政権交代した後も、突厥や陳と連繫する事で北齊を攻略した。一方の東魏・北齊は、高歓の後継者達は大局的な外交構想を持たず、侯景の乱の折には二正面作戦で自国を疲弊させ、その後も梁朝再興に固執して陳と和睦する機会を逸し、遂には陳と連繫した北周に滅ぼされた。この様に、外交戦略は両国の興亡の明暗を分ける重要な要素であったと言える。

周隋革命時の楊堅の対外政策については、平田陽一郎氏の優れた研究がある。⁽²³⁾ まず平田氏の研究成果を主として紹介しながら隋建国前後の楊堅の外交政策をまとめ、次いで隋の対外政策について西魏・北周の影響も踏まえながら筆者の考えを述べたいと思う。

北周からの禪譲をもくろむ楊堅に対しては、尉遲迥（宇文泰の甥）、北周宗室の諸王等が反発した。外には突厥という難敵もあり、楊堅は内外の憂患に直面した。事実、尉遲迥は楊堅に対して叛旗を翻すと、北では高宝寧と連合して突厥と通謀し、南の陳に対しては江淮の讓渡を条件に支援を求めた（『周書』卷二尉遲迥伝）。また後梁では、尉遲迥に呼応して蜂起し、北周から独立すべきだとの意見が政府内から

出た（『周書』卷四八蕭巖傳、『資治通鑑』卷一七四）。楊堅は、反対勢力（北周の諸王、尉遲迥、突厥、北齊亡命政権、陳、後梁）の連繫を阻止するために、外交的な対策として、北周の宣帝が計画した千金公主の突厥への降嫁話を進め、突厥と和睦すると同時に、公主の降嫁を名目に北周の諸王を長安に呼び寄せ誅殺した（『隋書』卷一高祖紀、『資治通鑑』卷一七四）。その後、楊堅の説得にに応じて佗鉢可汗が高紹義を引き渡したため、北齊亡命政権は崩壊した。楊堅は尉遲迥に対して軍勢を派遣し、これを撃破した。陳は結局派兵せず、後梁も政府の大勢が楊堅の優位を信じて尉遲迥に呼応しなかったため（『資治通鑑』卷一七四）、尉遲迥の乱は拡大せずに終息した。高宝寧も突厥の支援を得る事なく、五八三年（開皇三）、部下に殺害された（『資治通鑑』卷一七五）。以上が、平田氏の論考に基づいた周隋革命時の国際情勢であり、楊堅は外交も巧みに用いつつ各個撃破で敵対者を鎮定したのであった。

次に、隋の外交、特に建国期の隋にとって最大の課題であった突厥への外交戦略について、筆者の考えをまとめ、本稿を締め括りたいと思う。隋は、大局的な中国統一戦略、対外戦略として北周武帝の政策を継承し、先に強大な突厥を攻略して北方の脅威を取り除き、次に陳の討滅に全力を傾注して中国を再統一しようとした。⁽²⁴⁾ このため楊堅（文帝）は隋を建国（五八一年二月）した後、突厥の攻略に照準を合わせ、突厥に対し、軍事面、経済面、外交面から強攻策を断行し、まづ北周時代から続いていた突厥への歳幣を停止した。⁽²⁵⁾ 突厥は激怒し、大挙して隋に入寇したが、文帝は派兵してこれを撃退後、長城と要塞の増築による辺防強化によって突厥の更なる入寇に備えた（『隋書』

その後、文帝は外交面からの突厥攻略として、長孫晟の提唱する離間策（遠交近攻策もあり、離強合弱策もあった）を実施し、複数の可汗を互いに対立させて突厥の内紛を煽った（『隋書』卷五一「長孫晟伝」）。突厥には、君主に相当する大可汗の他にも複数の小可汗が存在し、国家が地方分権的であった上に、大可汗の没後に後継者争いが勃発しやすく、内訌を誘発する弱点を国内にはらんでいた。隋は、この弱点を突いて突厥を分裂させ、その弱体化を促進したのである。文帝はまず、五八一年、西面可汗（西方の実力者）であった達頭可汗を懐柔して沙鉢略可汗に対抗させ、五八三年には阿波可汗を懐柔して沙鉢略可汗を攻撃させた。この時、阿波可汗が達頭可汗のもとに出奔し、突厥は東西に分裂した⁽²⁸⁾。突厥が東西に分裂した後も隋は油断なく離間策を続行し、例えば次代の煬帝は、弱小だった啓民可汗を懐柔して東突厥の都藍可汗や西突厥の処羅可汗を牽制させ、突厥が強大化しないよう配慮を怠らなかつた（『隋書』卷八四突厥伝、西突厥伝）。

尚、遠交近攻策は、東魏が吐谷渾と連繋して西魏を東西から挟撃した際に用いられた外交政策である。また、諸勢力の対立抗争を助長して内訌を煽るという方法は、梁の諸王の権力闘争に乗じて南方への領土を拡大した西魏の対外政策である。隋の突厥対策には、この様に西魏・北周時代の外交戦略の影響を見て取る事ができる。

ここで、歴代諸王朝の北方遊牧政権への対応策と隋のそれとを比較したいと思う。例えば、前漢は武帝が匈奴に対し、幾度も遠征を繰り返して匈奴を弱体化させた後によく攻略し、唐は、建国直後から東突厥と西突厥に対し、やはり大規模な遠征を行って、これらを相次

いで鎮定している。また、北宋も建国当初より遼の攻略に苦闘しているが、結局、屈服させる事ができなかった。この様に、建国時の中国諸王朝は概ね強大な北方遊牧政権の脅威に対し、武力を伴った対抗策を講じている。一方、大々的な遠征を行わず、外交によって効率よく突厥を分裂させた隋は、中国史上、平和裏に北方対策に成功した稀有の例であったと言えるのではないだろうか。おそらく、西魏・北周時代に熾烈な外交戦で切磋琢磨した経験が、隋を外交に熟達させたのではないか。

隋は、煬帝が三度の高句麗遠征によって国力を疲弊させ、対外政策に失敗して国を滅ぼした印象が強いが、文帝と、煬帝の治世初期の外交政策は秀逸であり、先述の様に強大な突厥を戦わずして弱体化させる事に成功したのであった。周辺諸族まで含めた外交戦略が、覇業を達成するためには重要であった事が窺い知れる。

註

- (1) 魏晋南北朝時代については、岡崎文夫『魏晋南北朝通史』（平凡社、一九八九年、初版は一九三二年）、谷川道雄『増補・隋唐帝国形成史論』（筑摩書房、一九九八年、初版は一九七一年）、川勝義雄『魏晋南北朝』（講談社学術文庫、二〇〇三年、初版は一九七四年）、川本芳昭『中華の崩壊と拡大・魏晋南北朝』（講談社、二〇〇五年）参照。
- (2) 氣賀澤保規『府兵制の研究』（同朋舎、一九九九年）、平田陽一郎『西魏・北周の二十四軍と「府兵制」』（『東洋史研究』七〇巻二号、二〇一一年）参照。
- (3) 濱口重國『西魏の二十四軍と儀同府』（『秦漢隋唐史の研究』上巻、東京大学出版会、一九六六年）、谷川道雄『西魏二十四軍の成立と豪族社会』（『増補・隋唐帝国形成史論』所収）。

- (4) 濱口重國「府兵制度より新兵制へ」(『秦漢隋唐史の研究』上所収)、谷川道雄「府兵制国家と府兵制」(『増補・隋唐帝国形成史論』所収)。注(2)も参照。
- (5) 和田博徳「吐谷渾と南北両朝との関係について」(『史学』二五巻二号、一九五一年)、坂元義種「倭の五王―空白の五世紀」(教育社、一九八一年)、榎本あゆち「南斉の柔然遣使・王洪範について」(『名古屋大学東洋史研究報告』三五号、二〇一一年)。
- (6) 西魏包圍網については、呂春盛「北齊政治史研究―北齊衰亡原因之考察」(国立台湾大学出版委員会、一九八七年)参照。
- (7) 岡崎注(1)前掲書、吉川忠夫『侯景の乱始末記―南朝貴族社会の命運』(中央公論社、一九七四年)、川勝注(1)前掲書、前島佳孝「西魏の四川進攻と梁の帝位闘争」(『中央大学大学院研究年報』二九号、文学研究科篇、一九九九年)、前島佳孝「西魏・北周の四川支配の確立とその経営」(『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所)六五号、二〇〇九年)。
- (8) 護雅夫「突厥と隋唐両王朝」(『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社、一九六七年、初出は一九六四年)、護雅夫『古代遊牧帝国』(中公新書、一九七六年)、平田陽一郎「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政權」(『東洋学報』八六巻二号、二〇〇四年)、平田陽一郎「周隋革命と突厥情勢―北周・千金公主の降嫁を中心に」(『唐代史研究』一二号、二〇〇九年)。
- (9) 岡崎注(1)前掲書三〇七頁、呂注(6)前掲書一二六頁。
- (10) 藤野月子「五胡北朝隋唐期における和蕃公主の降嫁―その時代的特質との関連について」(『歴史学研究』八五五号、二〇〇九年)、『王昭君から文成公主へ―中国古代の国際結婚』(九州大学出版会、二〇一二年)。
- (11) 呂春盛「北齊政治史研究」上篇第二章「外在形勢対北齊北周抗衡の影響」等。
- (12) 竹田龍兒「侯景の乱についての一考察」(『史学』二九巻三号、一九五六年)三九〜四〇頁。
- (13) 柔然については内田吟風「柔然時代蒙古史年表」(『北アジア史研究―鮮卑柔然突厥篇』同朋舎、一九七五年)、周偉洲「敕勒与柔然」(広西師範大学出版社、二〇〇六年、初版は一九八三年)、正史柔然伝については内田吟風訳注「蠕蠕・芮芮伝」(魏書・宋書・南齊書・梁書)(『騎馬民族史Ⅰ―正史北狄伝』平凡社、一九七一年)参照。
- (14) 吐谷渾については松田寿男「吐谷渾遣使考」(『松田寿男著作集四・東西文化交流Ⅱ』六興出版、一九八七年、初出は一九三七年)、和田注(5)前掲論文、後藤勝「吐谷渾に関する二、三の問題」(『史潮』五八号、一九五六年)、周偉洲『吐谷渾史』(広西師範大学出版社、二〇〇六年、初版は一九八五年)、『周書』吐谷渾伝については小谷仲男・菅沼愛語「隋書」西域伝、『周書』異域伝(下)の訳注(『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』一一号、二〇一二年)参照。
- (15) 氣賀澤注(2)前掲書。
- (16) ソグド人安諾槃陀については、護『古代遊牧帝国』、吉田豊「ソグド語資料から見たソグド人の活動」(『岩波講座世界歴史十一・中央ユーラシアの統合九〜十六世紀』岩波書店、一九九七年)、森安孝夫「シルクロードと唐帝国」(講談社、二〇〇七年)、吉田豊「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」(『京都大学文学部研究紀要』五〇号、二〇一一年)参照。
- (17) 岑仲勉『突厥集史』上冊(中華書局、二〇〇四年、初版は一九五八年)一五頁。
- (18) 後梁については山崎宏「北朝末期の附庸国後梁に就いて」(『史潮』一一年一号、一九四一年)参照。
- (19) 前島「西魏の四川進攻と梁の帝位闘争」九七〜九九頁。
- (20) 西魏・突厥連合軍による吐谷渾攻撃の年代を、『周書』吐谷渾伝は西魏の恭帝二年(五五五)、『資治通鑑』卷一六六は恭帝三年(五五六)とする。
- (21) 護『古代遊牧帝国』八八頁。
- (22) 高紹義については、平田「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政權」参照。
- (23) 平田「周隋革命と突厥情勢」。

- (24) 愛宕元「隋」(世界歴史大系『中国史2―三国と唐』山川出版社、一九九六年)二七八頁。隋は前半期、突厥対策が最大の課題であった事、陳の制圧に全力を注ぐために突厥への派兵を極力避けた事などについては、氣賀澤保規「アジア交流史からみた遣隋使―煬帝の二度の国際フェスティバルの狭間で」(氣賀澤保規編『遣隋使がみた風景―東アジアからの新視点』八木書店、二〇一二年)参照。
- (25) 平田「周隋革命と突厥情勢」四二頁、韓昇『隋文帝伝』(人民出版社、一九九八年)一六五頁。
- (26) 長孫晟は、千金公主を送り届けるために突厥に赴いた折に突厥の内情に通曉し、文帝に突厥を離間するための方策を進言した。
- (27) 池田知正「7世紀初頭までの突厥の政局―諸首長とその所部の分析を通して」(『東洋文化研究所紀要』一四九号、二〇〇六年)参照。
- (28) 突厥の東西分裂については松田寿男「西突厥王庭考」(『増補版・古代天山の歴史地理学的研究』早稲田大学出版部、一九七〇年)、護『古代遊牧帝国』、森安注(16)前掲書参照。

〔年表1〕 建国期の西魏の対外政策：535年～547年（西魏と東魏の攻防戦、西魏及び東魏の周辺諸族（柔然・吐谷渾）との婚姻政策）

年代	西魏・宇文泰と東魏・高歡の戦い	西魏の対外政策	東魏の対外政策
535年	北魏が東西に分裂	柔然の可汗阿那瓌に遣使し和睦を請願。	
536年 大統2、天平3	東魏の高歡が西魏に侵攻し、夏州（陝西省）を襲撃		東魏が梁と通好開始。以後、東魏は毎年の様に梁と使節を交換し友好関係を維持【東魏が梁と和親強化】
537年 大統3、天平4	高歡が宇文泰を攻めるが「沙苑の戦い（陝西省）」で大敗	文帝が阿那瓌の娘を迎えるために柔然に使者を派遣。これ以前、化政公主（元璽の娘）が阿那瓌の兄弟塔寒に嫁ぐ【柔然と通婚】	
538年 大統4、元象元	洛陽で西魏軍と東魏軍が激闘	文帝が乙弗皇后を降し、阿那瓌の娘を皇后（卓皇后）とする【柔然と二重に通婚し和親強化】	柔然が東魏に侵攻し、幽州（現北京）と肆州（山西省）を襲撃。9月、柔然が東魏の使者元整を殺害
540年 大統6、興和2		柔然が西魏を攻撃（文帝と廃后乙弗氏の復讐を阿那瓌が非難）廃后は自殺し、柔然は撤退。その後、卓皇后（阿那瓌の娘）が病死し、文帝は柔然との通婚を試みるが失敗【西魏と柔然が疎遠に】	高歡が柔然に遣使し「卓皇后は西魏に殺された」等と告げ、阿那瓌に通婚を請願。阿那瓌も東魏に遣使し通婚請願【東魏と柔然の通婚が決定】吐谷渾可汗の夸呂が柔然に道を借りて初めて東魏に遣使【吐谷渾が初めて朝貢】
541年 大統7、興和3			蘭陵郡長公主（常山王の妹）が菴羅辰（阿那瓌の太子）に嫁ぐ【柔然と通婚】
542年 大統8、興和4	高歡が西魏の玉壁（陝西省）を攻囲するが、難戦の末、撤退	突厥が西魏に初めて入寇。この頃、突厥は長城付近で絹を購入し、西魏との交易を希望	高湛（高歡の子）に隣和公主（菴羅辰の娘）が嫁ぐ【柔然と再度通婚し和親強化】
543年 大統9、武定元	宇文泰が「崑山の戦い（河南省）」で高歡に大敗		
545年 大統11、武定3		宇文泰が酒泉のソグド人安諾樂陀を突厥に派遣。突厥の上門（初代可汗）は大冨喜が【西魏が突厥と通好し、国際的孤立からの脱却を図る】	2月、孝静帝が吐谷渾可汗夸呂の従妹を娶る【時期不明：丘楽公主（濟南王匡の孫）が夸呂に嫁ぐ】8月、龔曠公主（阿那瓌の娘）が高歡に嫁ぐ【柔然・吐谷渾との和親強化】
546年 大統12、武定4	高歡が玉壁を攻囲するが、長期の攻城戦に疲弊し病氣となり撤退	突厥の土門が西魏に遣使し特産物を献上	
547年 大統13、武定5		東魏の侯景が援軍を請い、宇文泰は援軍を派遣するが、侯景が梁に帰順したと知ると軍を召還	正月、高歡が死去。高澄と対立した侯景は、梁に亡命。

【年表2】 対外拡張期の西魏の対外政策：548年～557年（南朝では「侯景の乱」が勃発し、北方では「柔然の滅亡」「突厥の興隆」が起こる激動の時期）

年代（西魏・東魏／北齊）	南朝（梁・陳）及び北方（柔然・突厥）の動向	西魏（535～556年）の対外政策	東魏（～550年）及び北齊（550～577年）の対外政策
548年	【侯景の乱が勃発（～552年）】		
549年 大統15、武定7		梁の岳陽王蕭詧が西魏に支援を要請したので、西魏は軍勢を派遣し、梁の漢東（湖北省）を攻撃	梁から寿陽、北徐州、東徐州、北青州、青州等を奪取し、淮南を占領
548～549年		東魏が10万餘の軍勢で西魏の潁州（河南省）を奪取し、同地に鄭州を設置	
550年		梁から安陸（湖北省）を奪取し、漢東を占領	【北齊の成立】
551年 大統17、天保2		2月、梁から汝南（河南省）を奪取 6月、長樂公主が突厥の土門に降嫁 【突厥との和親強化】	梁の江北を占領。 柔然の太子菴羅辰（阿那瓌の皇子）が北齊に逃走開始。北齊は長城を建設し北辺の防備を強化。
552年 廢帝元、天保3	突厥が柔然を攻撃し、阿那瓌は自殺。柔然の遺民は北齊・西魏に逃亡 【柔然の崩壊開始】 侯景が死去。11月、梁の湘東王蕭繹が江陵で即位し元帝となる。	梁から漢中（陝西省）を奪取。8月、四川の武陵王蕭紀が東に出撃（翌年、西魏軍が四川占領）。この頃、柔然の亡命者集団が阿那瓌の子孫を奉じて河右（陝西省・甘肅省）を攻撃し、涼州刺史の史寧がこれを撃破	9月、契丹が入寇し、文宣帝が契丹討伐。12月、柔然が突厥に攻撃されて南に敗走。文宣帝は突厥を討伐し、柔然の菴羅辰を庇護
553年 廢帝2、天保4	西魏が四川を占領（梁と吐谷渾の連繫遮断）	宇文泰が3万の騎兵で姑臧（甘肅省）にて吐谷渾を攻略。尉遲迥は四川を占領。涼州刺史の史寧が、北齊から帰還中の吐谷渾の使節団を襲撃 【四川を占領し、吐谷渾を攻略】 3月、突厥が遣使し馬5万頭を献上	3月、柔然の菴羅辰が叛いたため文宣帝が柔然討伐
554年 恭帝元、天保5	西魏が江陵を占領し、元帝を殺害	12月、江陵（湖北省）を占領し、梁の元帝を殺害。柔然の乙赫連官が広武（甘肅省）に入寇し、李師がこれを撃破	
555年 恭帝2、天保6	西魏が江陵で蕭詧を擁立 【後梁の成立】 陳霸先が蕭方智（元帝の子）を敬帝に推戴	正月、江陵で岳陽王蕭詧を擁立し「後梁」を樹立。 突厥に撃破された鄧叔子（阿那瓌の叔父）が西魏に亡命するが、宇文泰はこれを突厥に引き渡す	正月、北齊は蕭淵明（武帝の孫）を梁王に擁立するが、陳霸先は蕭方智を敬帝と対抗。7月、柔然遺民が入寇し、文宣帝が撃破。北辺に長城を建設。12月、北齊軍が南下を試みるが陳霸先に撃破され撤退
555年頃		涼州刺史の史寧が、突厥の木杆可汗と連合し吐谷渾の根拠地を攻撃 【西魏・突厥連合軍の吐谷渾撃破】	
557年 孝閔帝元、天保8	10月 陳霸先が即位 【陳の成立】	正月、宇文覺が即位し孝閔帝となる 【北周の成立】	陳霸先の即位後、王琳（梁の遺臣）が北齊に対し、蕭莊（元帝の孫）を梁王となすよう請願

〔年表3〕北周の対外政策：563年～580年（北斉滅亡前後の北周・北斉・突厥・陳の合従連衡）

年代	北周の対外政策	北斉の対外政策
563年 保定3、河清2	楊忠が北斉の20餘城を攻略。突厥の木杆可汗・地頭可汗・步離可汗が10万騎を率いで楊忠に合流。12月、北周・突厥連合軍が晋陽を攻撃【北周・突厥連合軍が北斉攻撃（第一次北斉遠征）】	北周・突厥連合軍が晋陽等を攻撃
564年 保定4、河清3	正月、北周・突厥連合軍の晋陽攻撃が失敗【北周・突厥連合軍の第一次北斉遠征が失敗】10月～12月、北周軍が再度北斉を攻撃するが失敗。突厥軍も撤退【北周・突厥連合の第二次北斉遠征が失敗】北周が宕昌を滅ぼす	正月、北斉が北周・突厥連合軍を撃退。9月、突厥が幽州を襲撃。北斉は北周・突厥連合軍の再襲撃を恐れ、捕虜にしていた北周皇族を帰国させ、北周との和睦を図る。閏9月、突厥が再度幽州を襲撃。10月～12月、北周軍が再度北斉を攻撃するが、北斉はこれを撃退
565年 保定5、河清4	2月、北周の使者が突厥に赴き、木杆可汗の娘を武帝の妻に迎えようとするが、可汗は北斉との通婚に乗り気で北周の使者を拘留	5月、突厥が初めて北斉に遣使して通好【突厥が北斉との和睦を画策】
567年	陳で華皎の乱が勃発。北周と後梁は華皎に援軍を派遣するが、陳軍に敗北【陳を攻撃するか失敗】	
568年 天和3、天統4	3月、木杆可汗の娘が武帝に嫁ぐ【突厥と通婚】陳軍が、後梁の都江陵（湖北省）を攻めるが攻略できずに撤退	
569年 天和4、天統5	9月、北斉領の宣陽を攻撃開始【北斉に侵攻】陳に遣使し旧好修復を請願【陳との和睦を図る】	宣陽を包囲する北周軍に応戦
570年	宣陽を巡り北周・北斉間で攻防戦が続き決着せず	蘇柱（梁の元帝の孫）を梁王に封じる【梁朝再興運動を支援】
571年	4月、北周軍が宣陽を奪取	4月、陳が北周討伐を誘うが北斉は応じず【陳の和睦要請を拒否】
572年 建德元、武平3	8月、陳と交渉し北斉攻略を計画。この頃から突厥の佗鉢可汗に対し、毎年絹絮綽縵10万段を贈るなどで可汗の歡心を買う	北周と陳が、連繫して北斉攻略を計画
573年 建德2、武平4		5月～10月、陳が秦州秦陽等を落とす【北斉の支援する梁朝再興運動が失敗】突厥の佗鉢可汗が北斉に求婚【突厥が北周奉割を画策】
574年	武帝が廢仏を断行	5月、陳が淮北（安徽省）を攻撃
575年	7月、武帝が北斉討伐に出撃【武帝の第一次北斉遠征】	陳が呂梁（江蘇省）を攻撃し北斉軍を撃破
576年	10月、武帝が再度、北斉討伐に出撃【武帝の第二次北斉遠征】	北周軍が侵攻し、晋陽等を攻略
577年 建德6、承光元	正月、武帝が北斉を滅ぼす【北斉討滅】	正月、北斉滅亡。2月、高紹義（文宣帝の子）が突厥に亡命。佗鉢可汗は紹義を支援【突厥が北斉の亡命政権を樹立し支持】
578年 宣政元	2月、陳が呂梁を包囲するが、北周は反撃。4月、突厥が幽州に入寇。5月、武帝が突厥征伐に向かうが病に倒れ、6月、崩御。武帝崩御を契機に幽州の盧昌期が范陽で蜂起し、高紹義と高宝寧もこれに呼応するが、北周が盧昌期を撃破すると、高紹義らは撤退	
579年	北周の宣帝が突厥に和睦を請願。宣帝は、突厥への公主降嫁と高紹義の北周への送還を交換条件とするが、突厥は応じず	
580年	楊堅が、北周の千金公主を突厥の佗鉢可汗に嫁がせ、突厥と和睦	
581年	2月、楊堅が、北周の静帝から禪讓されて隋を建国【隋の建国】	